

## ハタンバートル・マクサルジャブ

——モンゴル独立運動指導者の一つの典型——

一

モンゴル諸種族のもとでくすぶっていた独立への悲願は、辛亥革命による清朝の顛覆を機会に、外モンゴルでは発火点に達し、同年一二月、活仏を元首とするモンゴル政府は自治を宣言した。翌一二年にロシアはそれを承認したが、外モンゴル地域に対する宗主権を主張して譲らない中国は、キャフタ条約において一応満足すべき結果を得ると陳籙、陳毅の軍をクーロンに駐屯させ、さらに、ロシアの一〇月革命の報を聞くと、その余波を未然に食いとめるため、徐樹錚にクーロンを占領させて自治をとり消させた。中国との間に、独立モンゴルという緩

田 中 克 彦

衝地帯を欲するロシアと、モンゴルに対する宗主権をあぐまで手離すまいとする、この二大国間の微妙な緊張関係を敏感に考量することは、外モンゴルの独立を実現するに不可欠の要件であった。辛亥革命と一〇月革命という、相つづいて起きた二つの大きな変動、さらに、革命軍の追撃をうけてモンゴルに侵入した反革命軍の残党による主都クーロンの占領、これら今世紀初頭の激動の連鎖が形づくる一〇年間は、モンゴル民族が異民族のほしいままな搾取を最終的に脱して、独立の国家を形成しうるか否かを賭けた、光輝と暗黒が境を接していた時代であり、為すすべもなく塗炭の苦しみに投げこまれた一つの民族が、あるべき国家の存立を様々な方面に手さぐ

りして求めていた時代であった。ウングェルン自身、内モンゴルをはじめ、モンゴル諸族を糾合して、チンギス・ハーン帝国の再建をさげんでモンゴル人の歓心を引き、ウングェルンの配下、アタマン・セミヨノフが鈴木少佐と共謀して、ジャライト出身のネイジ・トインを首班とするモンゴル諸族統一に立つ大モンゴル国家の建設案を提出したのもこの時期である。

独立への、このような様々のあがきの中で、ゲンバルシェフスキーやクチェレンコなどのロシア人を通じて革命思想にふれ、<sup>(1)</sup>一貫して社会主義への路線を歩んだスヘバートル、チョイバルサンの活動が、混迷の時代からモンゴル民族を救って今日あらしめた、公式の歴史記述が説いている、そのこと自体は誤りではなく、妥当であろう。しかし、この期のモンゴル民族の抵抗運動、その軍事活動が何にささえられてどのように指導され、またどのような人物が指導しえたのか——こういった具体的なイメージは必ずしも明瞭な輪郭をとって来ない。

一歩事態が異なっていたら、今日のアメリカ・インディアンの如き境涯につき落されていたかもしれない、民族としてのこの苦難の時代の体験に、まとまりをもった

像を結ばせる作業はもともと歴史家のものであろう。しかしモンゴル現代史のうち、起伏に富んだこの時代を正面からとりあげようとすると、歴史家は必ずしも恵まれた条件に置かれておらず、はかぎらない。というのは、この時代のあらゆる歴史的時点をつないで、大まかにもせよ、きれ目のない一つの連続を作るには、書き残された記録がさほど豊富ではないからである。次には中ソのイデオロギー上の論争の経過が、この大兩國にはさまざま、そのいずれからも友好的援助をとりつけているために一層、この国の、とりわけ歴史研究の上に微妙な反映を落すことである。あまりにも卑近な例ながら、チンギス・ハーンの評価をめぐる問題をあげておこう。<sup>(2)</sup>

いずれにせよ、歴史家は、このような困難な課題を少しでも解決すべく、着実な方法を実行に移しはじめた。それはこの期を生きぬいた人たちの記憶を記録にとどめることである。その一つは、モンゴル人民革命四〇周年に捧げられた『モンゴル人民義勇軍の回想』と題する八百ページに及ぶ大冊であり、ロシア反革命軍、中国軍との戦闘に加わった二百名を越えるバルチザン兵士のメモワールを収めている。<sup>(3)</sup> 続いて現われた『スヘバートルの

回想』には党関係者をはじめ、その親族に至る一〇五名の思い出が収められている。<sup>(4)</sup>

これらの記録は、個々の体験を、つじつまを合わせることなく忠実に報告することを旨としており、それを読む者はあたかもフィルムの一コマ一コマのシーンを見るような強烈な実感に動かされるのである。それに対して「歴史小説」とも称び得べき一連の現代文学の諸作品が現われている。これらの作品がいわゆる現代日本の世界文学観からみて——「世界」文学の「世界」はこの場合詐称である——文学と称ぶにふさわしいものであるかどうか、このばあい筆者は敢えてその呼称にこだわらないことにする。そのあるものは、史実への、つまり民族の歴史的体験への執拗な反芻が「文学」をはるかに越えているからである（後で筆者は冗長をいとわずその実例の一片を示すであろう）。たしかにこの期は、民族としての歴史的体験を、登場人物を通じて追体験しようという作家の意欲をかきたててやまない時代である。以下において筆者は、このような片々たる回想の記録を、歴史小説における描写とを交互に視野に置きながら、当時の軍事指導者のすがたを、とりわけマクサルジャブのそれをいくらか

でも明らかにし、モンゴル民族革命の事実に迫るための足がかりともなり得る資料を提出したのである。

## 二

ハタン・バートル（毅き英雄）という称号を冠せられ、明らかに広汎な人民から強い敬慕の念を寄せられていた、この特異な英雄は、五百数十頁に達するモンゴルの公式の通史においても、一九二一年の西部解放戦線で白衛軍を破った一軍事指導者としての、ささやかな言及があるにすぎない。<sup>(5)</sup>一九二一—二四年にわたる人民共和国成立の過渡的段階を特に解明したシレンデブの著書は、かれについてやや詳しく述べている部類に属する。<sup>(6)</sup>我が国正統史家のうちでは矢野仁一氏が「庫倫の支那官憲が莽頼王、哈丹巴格図爾等主謀者を収禁」したという一九一九年の興味ある事実を述べてはいるが、かれらの活動についてはふれていない。<sup>(7)</sup>

現代モンゴル研究家のうちで、マクサルジャブに深い関心を示し、比較的まとまった知識を提供しているのはラティモアであろう。モンゴル諸族から現われた独立の闘士ならば、その顔がどの方向を向いていようが決し

て見落さない眼光のするどきは、かれのどの著作からもうかがえる。かれはチョイバルサンの著したマクサルジヤブの伝記があると指摘しており、この伝記は前にあげたモンゴル版『共和国通史』の文献目録にも引かれて<sup>(8)</sup>いる。これは我が国学会に全く未知のものであるだけに、ラティモアが前掲の著書において、あまり詳しくふれていないのは惜しまれる。しかし「遊牧民と人民委員」において<sup>(9)</sup>は、「スヘバートルやチョイバルサンの名が知られるよりずっと前に、『西部の戦士』として名高かった指導者として、その生い立ちと戦歴にふれている。<sup>(10)</sup>ラ氏の紹介は前記の「伝記」にもとづくものとしてさしつかえないだろう。一九五一年に、モンゴル科学委員会の歴史部会が革命三〇周年を記念して出版した全四巻から成るチョイバルサン演説・報告集には、この伝記は含まれていない。その代りに、この集成第一巻には、マクサルジヤブの追悼記念集会上においてチョイバルサンが行なった演説が収めてある。<sup>(11)</sup> わずか八頁の分量は、四二年版の単行本に及ぶべくもないが、一九二七年一月一日号の『ウネン』紙に掲載されたものであるから、時代的には「伝記」より早く、その意味では価値があるろう。演説

はマクサルジヤブのすぐれた人間性をたたえ、その軍功によってソビエト赤軍から赤旗章を受けたことを強調している。人民文化省の主催であったこの集會での語りくちは親しみ深いものがある。

ラ氏が「小貴族の出身で少年の頃は貧しかった」としているのに対し、二七年演説では、貴族の出身ということには全くふれられず、貧しい家庭に生まれてみじめだったと語っている。またラ氏が農業で暮しをたてていたというのに対し、その他にも運送人夫や皮なめしもやったと述べている。かれの生年は言及されず、ただ宣統三年（一九一二）には三三歳であったと述べているので、生年は一八七八年であることがわかる。一九一二年のコブトの包圍戦では、すでに雄名をはせたこの英雄はわずか三四歳、二年の西部解放戦では四三歳のさかりであったことがこれによって知られる。

軍事指導者としてのマクサルジヤブの生涯は三つの大きな歴史的事件に対応して区分される。その第一は一九一二年のコブトを中心とする西モンゴルにおける、清軍、漢人との戦闘である。第二は、一九一九年の徐樹錚によるクローン占領と、徐軍を破って新たにクローンを

占領したバロン・ウンゲルン・シユテルンベルク支配の時代である。マクサルジャブは前者により監禁され、後者の占領によって釈放された。第三は一九二一年の西モンゴルにおける闘いで、ワンダノフとその配下の白衛軍を滅ぼし、スヘバートル、チョイバルサンの政治路線に合流し、革命を勝利に導いた決定的な瞬間である。モンゴル民族独立の可能性を摸索した時代から、危機的な諸段階を経て独立に到達するこの時期において、マクサルジャブが事件の局外にたっていたことは一度もない。

### 三

ウンゲルンによって釈放されたマクサルジャブは、西方における白衛軍を支援して、中国軍に当るべく出発する。しかしウリヤスタイに到着したマクサルジャブ軍は、逆にウンゲルン配下のワンダノフ軍を一網打尽にして、白衛軍に致命的な打撃を与えた。独立イコール反漢の如き意識につちかわれた、あの一連の独立運動指導者の例外でなく、マクサルジャブが漢人対ロシア人という二者択一にのぞんで後者をとったことは説明を要しない。しかしそれが白衛軍への逆襲に移るまでは飛躍がある。

シレンデブは「西部諸地域鎮定という口実でウンゲルンによってクーロンからウリヤスタイに派遣されたハタン・バートル・マクサルジャブは、自分の部隊をひきつれて、ウリヤスタイにおける白衛軍権力の打倒を準備した。」<sup>(12)</sup>と述べ、通史は、「ちょうどこの頃（一九二一年六月）、ハタン・バートル・マクサルジャブは人民政府と連絡をもって、ウリヤスタイで蜂起し、ウンゲルンの走狗であったシユテイン、ワンダノフらを滅した。」と記している。<sup>(13)</sup>前者はマクサルジャブが白衛軍と抗争を開始するに至った経過は説明しておらず、後者は人民革命党との連絡を確認しているが、やはり、そこに至った事態の説明がない。ラティモアは「かれはジュブツンダンバ・ホトクト政府のもとで要職を得ると、ウンゲルン・シユテルンベルクに服した。しかし、スヘバートルとチョイバルサンのバルチザン部隊がウンゲルン・シユテルンベルクと中国に対する闘争を起すとかれらに合流し、西北方のロシア白衛軍との闘争とその武装解除に指導的な役割をはたした。」<sup>(14)</sup>と述べ、政治状況の変化に伴って起きたマクサルジャブの路線の変更を示唆しながらも、この「合流」がいかにして起こりえたかについては説得

的な説明を与えていない。そこで、「もし事のなりゆきが少しばかり違っていたら、彼は容易に『コサツク』型のナシヨナリスト指導者になっていたかもしれない。」という記述は、この「合流」或は寝返りの秘密に対応するものではあるが、依然われわれの疑問に答えてはくれない。

そこで筆者は、この期におけるマクサルジャブが、現代作家の歴史小説の中でどのように描かれているかを見たい。ロイドダムバの「清きタミルの流れ」と題する作品は、エルデニという一人の牧民が、擄取の自覚にめざめて、運命の変転の後、自ら人民革命軍の戦列に身を投じるといふ道具だてで、独立に至るまでのモンゴル史の重要な諸段階をこまかく描き出している。このような歴史小説は、公式の歴史叙述よりも、個人人の動きをはるかに具体的に伝えており、思わぬ資料を汲み上げることができる。以下引用は極くかいつまんだ形で行なうが、引用の目的のために、原作が文学としてたたえる力を、ここで伝えることは断念しなければならない。

ハタンバートル・マクサルジャブは騎兵隊を率いてウリヤスタイに到着した。(中略)ウリヤスタイの要塞司

令官は、ウンゲルンの命を受けてここへやって来た、ワンダノフだった。ワンダノフはウンゲルンの将校とともに、ソビエトロシヤへの遠征軍のためにモンゴル人の徴兵に従事していた。(中略)ワンダノフは憤懣やる方なかった。ウリヤスタイの統治者チュルテムは、かれの指令を公然と無視していた。そこでかれは、チュルテムを呼びつけた。

チュルテムはワンダノフの活動のことごとくに協力しなかったのみか、臨時人民政府に使者を送った。ワンダノフは遂にチュルテムを逮捕して銃殺した。その数日後、マクサルジャブがウリヤスタイに到着したのである。ワンダノフは礼をつくして迎えた。マクサルジャブはチュルテム処刑の知らせを前以て受けていたが、事を慎重に運んだ。夜の点呼の時を利用して一挙にとりおさえようと計った。しかしワンダノフだけは点呼に現われなかった。マクサルジャブの合図で、一瞬のうちに全将校がとりおさえられた。ワンダノフは、マクサルジャブがチュルテム銃殺の件をただでは置かないと覚ってひそかに逃亡していたのだった。マクサルジャブの追手は、銃撃を交したのち、捕えてつ

れ帰った。ワンダノフは処刑にのぞんで泣き叫び、みじめな命乞いをした。

「文学」において、事件のこのような経過を構成するための素材は、伝承にまで肉化した民族共有の知識にもとづくものであろうか、或は作家の解釈にもとづくものであるか。

すでに引いたメモワールの中には、一九二一年のこの闘いに、マクサルジャブの下に参加した少なからざる兵士が登場する。予め全体を構想された文学作品と異なり、きれぎれのフラグメントとして語られる。比較的まとまりのよいものもあれば、些細なシーンが拡大鏡を通ってくるかのように、こまごまと述べられることもある。世紀から世紀へと、草原の英雄叙事詩を伝承してきたこの民族は、二〇世紀における民族のたたかいの口碑を、時として文学作品にまさる強烈なイメージをもって伝えていく。

「ハタンバートル・マクサルジャブは、背は低めだが肥っていて、陽やけた顔には鉤鼻があり、声は太く、いつもは茶色のチベット・ラシャの上衣を着ていた。戦いにのぞむと気性は猛々しくなり、堅忍不拔の人

だった。命令は厳しく、敵を迅速に除くのが好きな人だった。」<sup>(17)</sup> また別の者は、「青い繭紬の上衣にモンゴル靴、丸帽子といういでたちで、背は中くらい、肥ってがっしりした体格で、顔は日やけて、鼻の大きい堂々たる男であった。兵士らには思いやり深くやさしかった。時には火うち石と小刀を下けていることもあり、木のケースに入れた銃と、黄色の飾りをつけた、反ったサーベルと、いつも持ち歩いて<sup>(18)</sup>いた。」というような語り口で、兵士らはマクサルジャブをしのぶことを多数持っている。

歴史書では、せいぜい多くて数行で片づけられる、マクサルジャブの率いた戦闘は、部下のすべての兵士にとって、印象の強い記憶すべきことであつたらしく、事態の推移が念入りに語られているのである。これら兵士の回想の一つ一つが、ロドイダムバの小説の記述によく対応していることは、次のように回想の各部分を接続させることによってわかる。

「当時ハタンバートル軍及びワンダノフ両軍の兵士は、ウリヤスタイに共に駐屯しており、兵士らは毎晩、ダラ・エヘというお経を読んでいた」(口・ダグワ MAAL-

「四155」。「両軍の兵士併せて約千人は、毎日、体操、射撃、作戦の訓練をやり、夜は点呼があつて、マーニやメグゼムを読んでから解散するのであつた」(II・デンデブ MAKUJI 294)。毎晩行なわれた、かくも熱心な読経は、「ワンダノフ配下のブリヤート人兵士の中にはラマ僧が多かつた」(C・ジャムサラン MAKUJI 342)。からであると思われる。マクサルジャブの一斉蜂起は、読経を以て終る夕べの集合の機会を利用したのである。

「ある日マクサルジャブは、私を呼んで来させて、今夜ワンダノフ軍抹殺を決行すべく準備しているのだと語つた。全軍にワンダノフ軍撃滅の秘密命令が伝達された。私は、自分の気のおけない知人である、ダライ・ワン旗出身のサンジスレンに、ワンダノフ軍をやっつけると言つても、それをどうやってやるのだろうか、と、そつと相談してみたものだ。まさにこの日の夜、マクサルジャブの兵士がワンダノフの兵士と集合するが早い、秘密指令のとおり、ハタンバートル配下の兵士ら三、四〇人が、突然どつと襲いかかつて、ワンダノフの兵士をつかまえて全部打ち殺しているのを見て、サンジスレンと私はすっかり気が強くなつて、いつもはワンダノフの

傍にはべつていたブリヤート人のデレクという奴を、二人で一緒に打つて打ち殺した」(II・ダタワ MAKUJI 156)。「打ち殺す」という表現が単なる比喩でないことは、やはりこの蜂起に参加したバルチザンの報告が示している。「三百の兵のうち、ロシア人、ブリヤート人が三、四〇人居た。これは全部つかまえた。この連中は、棍棒やラクダのシャタ〔積荷の際に用いる道具〕などで、全部打ち殺した。音をたてぬよう一発たりとて発砲してはならぬという命令が出ていたからだ」(II・ラワーン MAKUJI 424)。「敵の兵力、有勢な武器に比べて、こちら側は兵力も火器も劣っていた。例えば我軍の武器は水バムリー〔?〕、日本製小銃、ショーシ機関銃〔?〕、ルーシ機関銃〔?〕であつた。しかし白軍には全視小銃、マクシム機関銃、テクトロフ機関銃があつた」(II・ゲンデンジャムツ 150)。大胆不敵なこの計画は成功して、ワンダノフ軍に居たモンゴル人はマクサルジャブ軍に加わり、白軍の火器はすべてマクサルジャブ軍のものとなつた。

## 四

逃げ行くワンダノフ一行の逮捕と、ワンダノフの処刑もまた、多数のバルチザンが述べていて、ロドイダムバの小説に対応する場面は、はるかに詳しく知ることができる。とりわけ、追手となってワンダノフを逮捕した当事者の兵士たちは、その顛末をことこまかに語っている。

「一九二二年一九歳のとき、私は志願してハタンバートル・マクサルジャブの軍に入った。一九二一年七月の中頃、かれは私に、ウリヤスタイから逃走したワンダノフをつかまえて来るべく任務を与えた。この任を帯びて、我ら同志らは搜索のため、ウリヤスタイ南方のガンツ峠という所まで行って家々に聞きこみを行なっているうち、ツァガン・ボラクというところを数人の人たちが通って行ったのだが、その中にロシヤ服姿の者が居たという話を聞いた。追跡を続け、ホショーチ・ベイセの役人、ダムディンスレンにこのことをたずねると、連中は銃をもって居り、私どもの旗の領内に入ろうとしているところだと教えてくれた。(中略)ワンダノフはこの男から、黄色い絹の僧衣を買って着こみ、クローロンへ行くのだと言って立ち去ったという。このはなしは、旗の役

人ダムディンスレンが前に教えてくれたところと一致するので、今こそワンダノフを捕えようと、その行手の道中で待ち伏せるためにショラク・ウルトンにやって来た。このウルトンのザンギをしているボンツァク、駅員ダムバ、ツェウエーと相談し、ワンダノフとその随員(全部で五人だった)がウルトンに着いて、馬を換えるために降りたら、そこをとり押えようと打合せた。(ダムバは腕っぷしの強い人だったので、かれがワンダノフを後からはがいにじめにすることにした。)ほどなく日没前になって到着したので、予め打合せた通りに、ワンダノフは例のダムバが、そのつれは他の連中が捕えたのである。するとワンダノフは「おれたちは知らない間柄ではないのにからかうなよ」と、放してほしさにごまかそうとしたが、そんな手に乗ることなく、即刻手をしばりあげて、身につけていた武器をとりあげた。こうしてワンダノフを捕えるとショロート・ウルトンまで行って泊り、翌朝ドブツォク・ハイルハン「山」の西の脇にいたハタンバートルの軍のところまで連れて行き、ハタンバートルに上記の者どもを引き渡したのである」(J・ダムディン MAKIJI 209)。

ワンダノフ逮捕の一件には数々のエピソードがまつわっている。「ワンダノフは逃走の途中、シヨラク・ウルトンで降りた際、どうしてこうにぎやかなのだと人々にたずねたところ、皆は『あなたが来るといっているのでこうしてさわいでいるのです』と答えた。ワンダノフはそれを本気にして、ウルトンに着くと、例の準備万端整えていた人たちが捕えて、ハタンバートル・マクサルジャブの兵士に引き渡した」(C・ジャムサラン MAKIJI 348)。

ワンダノフの逮捕は軍以外にも民衆の協力があつた。「ワンダノフは弟のシヨボーホイと一緒に逃亡したのである。ドートのラマ廟でラマの僧衣を手に入れた。進んで行くうち、シヨロート・ウルトン近くで羊を放牧していた小娘を見つけて、娘さん、このウルトンに行つて、人が多勢いるかどうか、一つ見て来てくれ、羊はおれたちが見張つてやろうと言つて頼んだ。娘は走つてウルトンにやってくると、どうしたのだとたずねられた。娘はありのままを語つた。ウルトンの人たちは、ここに人はいないと言え、人がいるなどと決して言うのではないよと言つて娘を帰した。娘はワンダノフのところへ帰つて来ると、このウルトンには人は居ません。居

るのは一人だけですと語つた。こうしてワンダノフ一行がウルトンにやってくると、ワンダノフを捕えようと前以て待ちかまえていた多勢の者が捕えた。ハタンバートルはこの事ある前に、各ウルトンに対し、ロシヤ系ブリヤート人を見たら三日以内に捕えて殺すべしと、ひそかに指令を傳達しておいたのだ」(A・プレブ MAKIJI 565)。こうしてワンダノフとシヨボードイらは捕えられ、シヨボードイはその場で殺され、ワンダノフはハタンバートルの兵營に連行された。

マクサルジャブに引渡されたワンダノフはオニゴと云う者が銃殺した。プレブは続いて、その次第をこう述べている。

「ワンダノフは、ちょっとでいいから、ハタンバートルに会わせてくれと頼んだので、これをハタンバートルに伝えると、会う必要はない。さっさとあっちへつれて行けと言つた。それからオニゴという者がワンダノフを連れて行つて殺したのである」(A・プレブ MAKIJI 565)。

五

一九二一年に外モンゴルの各地における、白衛軍との戦闘で圧倒的勝利をおさめた一連の重要な戦局のうちでも、西方での勝利を決定的にしたマクサルジャブのそれは特に高く評価される。それだけに一層、ウンゲルンの依頼をうけて戦線に向ったマクサルジャブが、少なくとも外から見るとかぎりでは、突如として革命軍の路線に入った秘密は、これら兵士の証言によっても依然解き明かされない。そこでウンゲルンによる釈放以前に目を移してみた。矢野仁一氏が「哈丹巴格爾王」などの「収禁」にふれていることについてはすでに述べたが、その顛末を詳しく記しているのは、ロドイダムバの「清きタミルの流れ」である。

ハタンバートル・マクサルジャブは中国軍当局に逮捕され、二カ月以上も獄中であつた。

最初のうち、ガミン「国民党」のモンゴル読みで、この語により中国侵入軍一般を指す。どもは、すべての禁錮者を手荒く扱つた。かれらはマクサルジャブにもまた拷問を加えた。板子で何度も殴打した。が無駄だった。かれらは殴れば殴るほど憎しみにふるいたつた。中でも雄々しくふるまつたのは、マンライワ

ン・ダムディンスレンと、ノヨンのジグミドであつた。拷問の末、かれらは監房の中で死んだ。しかし立つたままだ。「敵の前では膝を屈せぬ。立つたまま死ぬのが戦士にふさわしいのだ。」ダムディンスレンは死を前にしてこう語つた。<sup>(19)</sup>

中国軍当局はここで手をかえ、懐柔によってマクサルジャブの翻心をはかるが、それは成功しない。ここに登場する、獄死したマンライワン・ダムディンスレンは、ほかならぬ矢野氏の「莽頼王」であり、またリンチンの壮大な歴史小説「曙光」に登場し、一九二二年、モンゴルを旅行したコンステンが、その旅行記の中でしばしば言及しているダムディンスレンその人にほかならない。ダムディンスレンの獄死を伝えているのは、ラティモアの間接的伝聞だけであり、「デイロワ・ホトクト」によれば、彼「ダムディンスレン」は徐樹錚時代、一九二〇年に獄死した。<sup>(20)</sup> というのがそれである。この情報は、ロドイダムバの小説によって裏付けされた。

しかし監禁中のマクサルジャブの姿をもっとよく伝えているのは、前記パルチザンの回想録であり、この兵士はちやうどこの期のマクサルジャブを知っており、さら

にその釈放後は、その軍に投じて西部の戦闘に従軍した。偶然とはいえ、このような記録は極めて珍らしいものに属するといえよう。

主都クローンで、一九二〇年の秋頃、ある夜の明け方、大砲の音がしはじめた。そうして朝になるとガミン軍がさむいで、通りを行く人々を逮捕しては、中国のシヤンズ〔戲院子?〕のところに監禁していた。これは、バロン・ウンゲルン軍がやってきて、ガミンと衝突したのだった。それは、マンライ・バトル・ダム、ディンスレン、ハタン・バトル・マクサルジャブ、ハラーギーン・ダラ・エヘ・ラマなど、多くの貴人、ラマらをガミンが逮捕し、監禁した頃であった。

ある夜のこと、一二時をまわった頃、邸の門を叩く者があった。それで私は出て行って、誰ですかとたずねたところ、私はレンチン・バトルですという答えだ。そこで門を開いてやった。私がキャフタで知りあった、あのレンチン・バトルだった。ハタンバトル・ワンが捕えられて三日もたっています。私は食べられるものを入れようとして三日も足を運んだけれども、中国語ができないので、ガミンの兵らは私の言うこと

がわからないのです。あなたが一つ手伝って通訳してしてくれないかという話だった。私は喜んでひきうけ、その翌日、レンチン・バトルについて、ゴ・シ・リン〔徐將軍の代理〕の高い家（現在の鉄工場の近くにあった。）まで行つた。警護の兵隊らにわけを話すと、だいぶたつてから警護頭に通じてくれた。それからガミンのだんなが現われた。私がわけを説明すると、食物なら自分たちのところだつてあると言つて、バトル・ワンに差し入れたい食物を受けとらなかつたので、われわれがくり返して頼むと、だんなは一たん中に入つてきてから、君たちは茶碗をもっているかと言つた。私たちは茶碗をもつていたので、ガミンのだんなは、では君たち、持ってきたものを食べてみると言つた。私ども二人は一碗食べた。こうしてしらべたのち、食物を受けとつて、バトル・ワンに差し入れてくれた。その後一週間たつた頃、バトル・ワンに食物を差し入れるときに下着を換えさせたが、しまいには食物を入れさせなくなつたのです。その後一〇日ほどたつてから、ガミンの兵隊に頼んでも聞きとどけてくれず、一度だけ衣換えを認めてくれた

が、それっきり差し入れを一切停止した。レンチン・バートルと私は、その後は出向くのをやめた(Ⅱ・ダシツェリン MAKHLI 247)。

ウンゲルンのクローン占領によって命びろいをしたマクサルジャブは、「数日の後、ウンゲルンの申し入れによって、活仏が国防大臣に任命した」(H. Дорон, ИАМБА СГД. 22)。

「しかしマクサルジャブはあらゆる手段をつくして、モンゴル人の全面的徴兵を妨害したので、すぐに西方国境防衛大臣に任命して主都から遠ざけた。」(同二三四頁)と、マクサルジャブの西行はウンゲルンによる左遷あるいは追放であったことを作家は示唆している。このような解釈は可能であるとしても依然解釈にとどまる。マクサルジャブの西征に同行したバルチザンの一人は、

一九二一年五月にダー・クローンから、バロン・ウンゲルンの命をうけて西辺相となって出発することになったハタンバートル・マクサルジャブの秘書に私は任命されて同行し、ウリヤスタイ市に行ったのだが、一体何がどうなっているのかわからなかった(M・ドルシテテム MAKHLI 265)。

と記しているくらい、マクサルジャブの胸中をはかることは困難なのである。しかしはっきりしているのは、かがウンゲルンの任命によってクローンを出発し、ウリヤスタイにおいても白衛軍と合同していたことである。だとすれば、白衛軍への叛乱は、出発の際すでに胸中深く計算されていたのか、或はウリヤスタイ到着までの期間に、スヘバートル、チョイバルサンの人民革命軍から具体的なはたらきかけがあったのか、或はこのナンヨナリストの感情を刺戟した何かのできごとがあったのだろうか。

マクサルジャブのウリヤスタイ到着の時、すでに白衛軍の手で虐殺されていた、ウリヤスタイ統治者チュルテム・ベイセは、かつて一九一二年のコブト地方において、中国軍に抗して、マクサルジャブと共に起ち上ったナシヨナリストであり(C・ジャムサラン MAKHLI 346)、正廉潔白人人としてモンゴル人の広い信望をあつめていた人物であった。ワンダノフ一行が、西モンゴルで行なった暴虐と盗賊行為は、住民の間に深い憎しみを植えつけ、その怒りをマクサルジャブに訴え出る者もいた(A・ブトロフ MAKHLI 565)。チュルテム・ベイセはその乱行を

りを黙過するに耐えず、中央に訴えたため、ワンダノフのうらみを買って殺されたのだとある者は述べている(X・ダムディンズレン MAKJII 215)。或はまたチュルテムが中国と密通したと称して殺したのだという理由づけも聞かれる(セルチンギン・ジャムサラン MAKJII 347)。またすで見たとようにロドイダムバは、チュルテムが臨時人民政府に使者をたてたと記している。

兵營の内部でも、ワンダノフへの不満は高まっていた。「ワンダノフは、モンゴル兵士から武器をとりあげ、六、七〇人のブリヤート人へのみ武器をまかせていた」といわれ、また「マクサルジャブが部下に酒をふるまっていると、ワンダノフ軍から酒をもらいに来た。自分が持っているながら、こっちに無心に来るとはどういうことだと皆が文句を言いあつた」という、軍隊生活の日を髣髴させるような発言もある(いずれもA・フレブ MAKJII 565)。

チュルテムの虐殺に手を下したのは三人のロシア人であつた(Д・ユムボストン MAKJII 129)。その惨殺の状況は、モンゴル兵の血を逆上させた(П・アビルミド MAKJII 39)。「着ていた茶色の絹の上衣と、繭紬のズボン

はずたずたに引き裂かれていた。それを私はこの目で見ただのです。」とバルチザンの一人は語る(サンダギン・ジャムサラン MAKJII 347)。マクサルジャブを決起に導いた直接のきっかけが、ナシヨナリストの感情に訴えないではないこれら一連の、諸事件であつたことは考え得ることである。

さきの報告を残しているジャムサランは、別の個所で見過すべからざる発言を行なっている。即ち、「この事件〔ワンダノフ軍撃滅〕の一週間前に、首都クローンより飛脚が到来して、ハタンバートルに手紙を渡した」(MAKJII 342)というのがそれである。手紙の主が誰であるかは明らかでない。「通史」は「ちょうどこの頃、ハタンバートル・マクサルジャブは、人民政府と連絡をとり、ウリヤスタイに蜂起を起こし、ウングレンの走狗となつていたシュテイイン、ワンダノフらを滅ぼした」(三二六頁)と述べている、その連絡の一つがこれであつたのかもしれない。スヘバートルはもともとマクサルジャブの部下として、一九一八年には機関銃隊を指揮し、後ほどスヘバートルの死(一九二三年)に際してはマクサルジャブが葬送の辞を読んだというあいだがらである。<sup>(21)</sup>

マクサルジャブはたしかにスハバートルやチョイバルサンのようなイデオログとしての面目は少なくとも資料の上で求めることは困難である。だがこの炯眼な軍事指導者が赤軍に関心を向けていたという証言は存在する。

ある日私の父はガンダン寺の南側にあったロシヤ人の洗毛工場で働いた賃金を受けとりに行つて、旧い知りあいのハタンバートル・マクサルジャブに会つて話をしたところ、「人民に自由を得させるために、赤いロシヤ人に援助を仰ごうとして、ある人たちが行ったのは本当だ。そのためにマンライ・バートル・ダムディンスレンが捕えられたのだし、自分にも嫌疑がかかっているのだ。君たちも気をつけろよ」と私に語つたものだ。それから間もなくして、ガミンの奴らはボグドやマクサルジャブらを捕えて監禁したのです(3・ガルスンジャムツ MAKHUU 113)。

ここでわれわれは、もう一つ時代をさかのぼつて、ロシヤ革命のおいすらなかつた時代におけるマクサルジャブの姿に目を向けたい。

## 六

徐樹錚によつて、ともに監禁されたダムディンスレンとマクサルジャブは、一九一二年のコプトにおける中国軍包圍戦においてもやはり行動をともしている。一〇月革命前期の、したがつて、ロシヤの革命運動の影響とはいかなる形においてであれ無縁な、かれらの反中国獨立闘争は、清朝治下においてモンゴル諸族が絶望的にくり返して来た一連の軍事行動の一つであつてそれ以上のものではないであらう。この期にモンゴルを旅行した者たちが、その中世的な残虐さへの恐怖をもつて語る、ジャー・ラマは、アモル・サナーの生まれ変りを自認することによつて、漢人にたいして容赦ない無慈悲な復讐を挑む、伝統的な獨立運動の闘士であることの權威づけを行なつたほどである。

ヘルマン・コンステン<sup>(22)</sup>の旅行記が必ずしも全面的に信頼度の高いものであるとは言えないながらも、その旅行中に出あつた、当時の興味ぶかい群像について、他では得られない情報を残している点は認めなければならぬ。コンステンはウリヤスタイ滞在<sup>(22)</sup>に目撃した、漢人

高利貸商人の非道な欺瞞による収奪とそれに復讐するモンゴル人の掠奪のもようを詳しく伝え、またマンライワン・ダムデインスレン、マクサルジャブ、ジャー・ラマの如き、当時の代表的ナシヨナリストと交渉をもって、かれらの姿を書き残した。

ダムデインスレンは、かれの筆によって、モーゼル銃に強い興味を示し、モンゴル軍装備の近代化に心をよせる、新しものがりやとして、また他方では、ゲセル廟詣<sup>(23)</sup>でを怠らない、民俗信仰への帰依者として描き出されている。ウリヤスタイ滞在中に聞いたこととして、コンステンはダムデインスレンとジャー・ラマによる、身の毛のよだつようなシャマンの儀礼について伝えている。イワン・マイスキーも「蒙古人を襲った奇爾吉人との衝突後、捕虜の胸を切開し、心臓を摘出せしめたが、これにても尚満足できない『阿睦爾撒納の後裔』<sup>(24)</sup>は死屍より皮膚を剥がしめて、或る教義上の儀式に用いた」と伝えた。「アモル・サナーの後裔」つまりジャー・ラマにまつわるこの話はコロストウエツによってもくり返されているが、ジャー・ラマに関するかぎり全面的にマイスキーの記述に拠っている。漢人への復讐のために生きつ

づけてきたようなこの男は、一八九〇年頃、ウリヤスタイの漢人総督の腐敗を怒って北京の清朝皇帝に訴えて以来、その足跡はチベットや故郷のアストラハンにも及ぶ。一九〇〇年頃にはコズロフのチベット探険の際に案内人をつとめるような一面をもちつつ、一九一二年のコプトの戦いでは三千人にのぼる中国人捕虜全員の銃殺を主張する無慈悲な復讐者であった。

一九二〇年代、モンゴルを独立の社会主義国家への軌道に乗せるための軍事行動において、決定的な役割を演じたと、人民革命党の評価をうけたマクサルジャブは、一九一二年には、「ジャー・ラマと同様、敵の心臓摘出という古いシャマンの呪術的儀礼を復活させた残忍な戦士であった」(ラティモア)。

西欧の権威ある国際学術雑誌にたびたびフランス語で寄稿する、自身、民俗学者であるリンチン博士が、その歴史小説ウーリーントヤール(曙光)<sup>(25)</sup>において、古文獻そのもののような乾いた冷たい文体の中に、この怖ろしいシャマン儀礼を行なうマクサルジャブの姿を描き出しているのを読むとき、われわれは、ただならぬ感慨におそわれるのである。

二人のモンゴル人使者を生きながら油の中で煮殺した漢人当局の処置に激昂して、

西辺鎮定相ダムディンスレンとマクサルジャブは、共戴二年、夏のはじめの月、新月八日の白い馬の日、ボグド・ハーンの親衛隊とホジルボランの兵士の中から六三人の精銳を選抜して出発した。新月八日を選んだいわれは、クローンの占術師らが、二人の貴顕の旅路の首尾よきよう、吉日をしらべ、まさにこの日である、水星無く、火と水の合するところの、死すべきさだめ、虚しい手、白い馬の日は、死すべきさだめによつていのちを奪い、抗する者を殺し、精氣をば乾し上げ、毒を混ぜるなど、諸事の成就する日なりと占ったことによる。

活仏の祝福を受けて出発したこれらの兵が「クローンの町はずれの通りやひろばにさしかかると、沿道の人々は家を出て、兵士らの後から乳酒を撒いて、敵をひしぎ、ダルハンの称号をかち得よとの祈願をこめた。」兵士の出陣、巻狩の開始にあたって馬乳酒を撒くという、極めて古い時代に発するこの儀式が、二〇世紀に入っても繰返されている。ここに見るような、民俗学者らしい細か

い観察の目で、例の人を軍旗に祀るシャマンの儀礼を描出しているのである。

マクサルジャブが兵列から手を振って合図をすると、シャムバは進み出て、軍旗を祀る、あの太古から伝わっている呪文を声たかくとなえた。

頭韻を踏んだ二八行の韻文がここに引かれる。ハイシヒ教授の研究によって、この祈願文の類例を知ることができるのであるが、ここでは深入りしない。シャムバはこの遠征軍が連れて行ったシャマンであることを指摘しておかねばならない。

このぞつとするような呪文をとなえ終ると、ダムディンスレンは指揮矢で合図を与えた。一〇人隊長の刑刀がふり下され、捕虜の兵士の首が切り落された。袖をまくり上げて小刀を抜くと、首なしの胴体をさぐり、血を噴き出しながら、びくびくふるえている心臓を抜きとつてマクサルジャブにささげると、將軍は、ダムディンスレンの拵げて支えている大きな旗の布に乗せ、大將軍旗の絹地に血をなすりつけた。

マクサルジャブは心臓をダムディンスレンに渡して血をなめさせると、今度は己が口に引き寄せて血をなめ

てから兵士らに渡して、たおれた敵の血を味あわせさせた。他の一〇人隊長らは、残った四人のとりこも同様  
に首をはね、鼓動する血まみれの心臓を、將軍旗とアイマクの旗にぬりつけた。<sup>(28)</sup>

コンステンがウリヤスタイを訪れて、その滞在中、ダムディンスレンと親交を結んで往來をかさねているのは、  
時期的にはこのことあって後、間もない頃である。コンステンのおかげで、銃をかまえるジャー・ラマの姿を写真で見ることができ、それどころか、例の血塗りの軍旗を背景に、ダムディンスレンの精悍そうな馬上姿を見ることができるのである。

\* \* \*

さて、一九一一年までさかのぼりえたマクサルジャブの姿を確実な資料にもとづいてさらに古くたどってみることは現状では困難である。以上の叙述において、筆者はマクサルジャブをめぐるエピソードに目を奪われず、たあまり、その像は依然として不完全なモザイクにしか映らない。否、モンゴル民族の独立のたたかいかいにおいて、英雄のすがたはほとんどこのようなエピソードにお

いてのみ記憶されているのかもしれない。モンゴル民族を闘争に起ち上らせ、革命への軍事的成功をもたらす決定的な力として、ここに見たような、中世モンゴルの英雄叙事詩からそのまま抜け出てきたかのような、これら軍事指導者の影響力を考えないわけにはいかない、ということをバルチザンの回想録は示しているのである。

マクサルジャブはモンゴルの伝統的なナシヨナリストの系譜の上に位置づけられる典型的な人物である。このような典型と無縁であったとは考えられないスヘバートルやチョイバルサンのような人たちがレーニンにテーゼに独立モンゴルの将来を見出して行った過程を明らかにする作業が本格的に為されるべきであろう。

〔追記〕 訳出したバルチザンの回想からの引用文には、口あたりそのままを文字にしたものが多い。筆者は、切れ味の悪い訳文ながら、強いてこぎれいにつくろうことは避けた。リンチンの文体を等価で日本語に移すことは、筆者の力には及ばなかった。

(1) この二人のロシア人労働者が、スヘバートル、チョイバルサンの革命グループ結成に功あったことは、チョイバルサンの『モンゴル革命簡史』、ツェデンバルの『同志チョイバルサンの生涯と業績』において、一度ならず言及さ

- れている。かれらはロ・モ印刷所の技師であった。かれらはマンダリン・ロシア語をモンゴル語に訳して出版された。
- X. Чойбалсан, Монголын хувьсгалын товч түүх, 1934.  
Ю. Дэлэндэл, Нахер Чойбалсангийн амьдрал, үйл явдлын тухай, 1945.
- 両著とも、ロシア語、中国語、ドイツ語でそれぞれ翻訳がある。
- (2) チンギス・ハーン生誕八百年祭式典における、中ソの立場の相違は次の著書によって、ややまとまった形で示されている。
- W. Heisig, Ein Volk sucht seine Geschichte, Die Mongolen und die verlorenen Dokumente ihrer großen Zeit, Düsseldorf-Wien 1964. Ss. 43, 44.
- (3) Монгол ардын журамт цэргийн дурдлагауд, Улаанбаатар 1961. # НХОН人民共和国科学アカデミー歴史委員会編。以下 MAJLID と略す。本書はついでついでに、その紹介は
- O. Лалтмояг, Nomads and Commissars, New York 1962. 磯野富十郎訳『# НХОН』岩波書店、八三頁以下に見られる。
- (4) Д. Сухбаатарын тухай дурдлагауд, Улаанбаатар 1965. # Куньмин生誕七〇年を記念した # ЦП、# ЦКの前記# НХОНの歴史委員会編。
- (5) Бүгд Найрамдах Монгол Ард Углын Түүх, Улаанбаатар 1955. 三二六頁。本書は# НХОН科学委員会（# ДЗМの前身）とソ連邦科学アカデミーの共編によるもので、# НХОН語、ロシア語の各版が同時に発行された。以下、# Түүх と略す。
- (6) Б. Ширендиль, Народная революция в монголии и образование МНР, Москва 1956. 本書の原著は# НХОН語である。筆者の手もとには# НХОН語版がなく参照できなかった。
- (7) 矢野仁一『蒙古近世史』一九二五年。四四六頁、本書は# НХОН人民共和国成立の翌年に出版されたものであるが、その多岐にわたる資料の利用と正確な記述とは類書に及ぶところがある。
- (8) O. Лалтмояг, Nationalism and Revolution in Mongolia, Leiden 1955. p. 64.
- (9) Түүх 四九四頁 Ардын хаган баатар Марсаржав, 1942.
- (10) 「# НХОН」八八—八九頁。
- (11) Оо. Сойбалсанг, Төдөл ба үгдэл-үд, 1, 1921—1937, 52—59 г.
- (12) Б. Ширендиль, стр. 62.
- (13) Түүх, 326 г.
- (14) O. Лалтмояг, Nationalism and Revolution, p. 64.
- (15) O. Лалтмояг, Nomads and Commissars. 邦訳八八頁。
- (16) Ч. Лодойдамба, Тунгааг Тамр 1962. 101—104

- ロシア語訳「Прозрачный Гамир」. Москва 1966, стр. 231—233 に拠った。
- (17) Л. Ропсанの回想 МАЖИД 四〇一頁。
- (18) Л. Ропсанの回想. МАЖИД 57.
- (19) Ч. Долойдамба, стр. 221.
- (20) О. Ларгюке, Nationalism and Revolution, p. 111.
- (21) О. Ларгюке, *Ibid.*, p. 114 また本書七六頁で、マツサルジャブが行なった追悼演説の中で、「チョイバルサンは党の創設者としても、尊敬すべき新しい国民的人間像としても言及されなかった」と述べている。しかしながら、Д. Сухбаатарын тухай дурдлагаар 1965 所収のマツサルジャンによる「同志チョイバルサン」の伝記には、「この論文はチョイバルサンと連名で書かれた」という編集者の注がある。だとすれば、「チョイバルサン」の名が出ないのは当然と言ふべきである。ラチキエフの言う追悼演説が、これとは別のものを指しているのかもしれない。もし編集者が注記を添えなければ、ここでも「マクサルジヤブはチョイバルサンを無視した」と言い得るであろう。われわれは、このようながちすぎた推測或は邪推に陥らぬよう注意すべきである。
- (22) Hermann Conrren, *Weideplätze der Mongolen*, II. Bde, Berlin 1919—1920. 矢野曰く『近世蒙古史』は本書を資料として用いたものとつは吾国では唯一である。
- (23) Conrren, *Ibid.*, Bd. I, S. 175.
- (24) Иван Майский, *Современная Монголия*, Иркутск 1921. 邦訳「南滿洲鉄道株式会社編『外蒙共和国』(一九二七年)上、一四六頁。
- (25) コロストウエッツ、(高山洋吉訳)『蒙古近世史』。一九二二年、コロストウエッツはロシア政府代表としてターロンに赴任、活仏政府と会談を行なった。コロストウエッツはコンステンを、コンステンはコロストウエッツのことをそれぞれ書いている。本書は、当時のモンゴル政府要人を、ロシア外交官がいかに評価していたかを示す点で資料となしう。ただし翻訳は不正確である。
- (26) Ринчен, *Уурийн гуяа*, Уланбаатар 1951. この三部作は、モンゴルがロシア文字による正書法で出版物を出した極く初期のものに属する。後、一九五三年、中国「内モンゴル自治区」で旧モンゴル文字に改めて刊行された。引用にあたっては内モンゴル版を用いた。『曙光』という題名は、内モンゴル版に付けられた中国訳の奥づけをそのまま用いた。
- (27) ウーリーントヤーにこのような珍らしい記載があることに注意をむけたのは、ハイニヒ教授が最初である。W. Harsig, *Mongolisches Schrifttum im Linden-Museum, Tribus*, Band 8/1959.
- , *Ein Volk sucht seine Geschichte*, S. 94—96.
- , *Mongolische volkreigliche und folkloristische Texte aus europäischen Bibliotheken*, Wiesbaden

1199) このすぐれたテキスト集がモンゴル及び隣接地域の民俗学研究に大いに裨益するであろうことは『民族学研究』31・4、一九六七年、で述べておいた。

(28) 著者はこの個所に注をつけ、「旗に人を捧げたのは事実である。」と強調している。

(東京外国語大学助教授)